ヴァルター・ベンヤミン伝のための三つの短章

野村　修

地下鉄から地上へ出て真昼の陽光を浴び、びっくりした経験は、誰にでも一度はあるだろう。そのくせ、数分前にかれが地下鉄へ下りていったときも、太陽はひとしく明るく照っていたのだ。それほどに速やかに、ひとは地上の天候を忘れ去る。それほどに速やかに、地上のほうもかれを忘れるだろう。なぜならかれの人生について、かれは若干の他人の生活のなかを天候のように優しく、身近に通りぬけていった、というより以上のことを、誰がいえようか。

ベンヤミン

収容所のベンヤミン
一九三九年九月〜一一月

パリの壁という壁に、ドイツ人亡命者たちの眼をひく掲示が貼り出された。ドイツ、オーストリア、およびザールラントから来ているすべての市民とその家族は、ナイフとフォークをもち二日分の食糧を携帯して、パリ市外のコロンブ競輪場のなかにある収容所に、ただちに赴くこと。一九三九年九月上旬のことだった。

周知のように、この年の九月一日にはナチ・ドイツ軍がポーランド侵攻を開始し、その翌々日にはこれに対抗して、イギリスとフランスがドイツに宣戦している。こうして、フランス在住のドイツ人は、ほかならぬナチ・ドイツから追われてきた者もふくめて、一挙に「敵国人」に転化し、強制収容の対象とされることになった。政治的亡命者、ユダヤ系のひとたち、フランス帰属に賛成投票して敗れたザールラントの住民、学者、芸術家、あるいはスペイン内戦に国際義勇兵として参加していたひとたち。誰ひとり例外ではなかった。かれらはフランス当局の指示にしたがってコロンブ競輪場へ出かけていった。その数は二万人におよんだ。ヴァルター・ベンヤミンもまた、そのなかのひとりだった。

ベンヤミン自身はここでの経験について一行も書き残していないが、同じ日々をここで過したほかのひとたちの回想から、ぼくらが想像をたくましくすることはできる。競輪場の石造りの観覧席に「罐づめにされたイワシのように」（ヘルマン・ケステン）詰めこまれ、配給されたわずかな敷きわらを石のベンチの上に敷いて眠り、

雨が降ればそのまま濡れそぼれていた二万人のなかに、ベンヤミンは少なくとも二人の知人を見いだした。そのひとりはケステンであり、かれについてベンヤミンはそのあと、ヌヴェールの収容所に移されてからのある手紙（一九三九年一一月二日付、ジゼル・フロイントあて）のなかに、「ぼくらの間柄はもともとはまったく儀礼的なものでしたが、コロンブ以来、かなり誠意にみちたものになっていました」と書いている。もうひとりはハンス・ザールだった。ケステンもザールも作家で、それぞれこの時期についての回想を書きのこしている。

「コロンブ競輪場の石のベンチ――これが一〇昼夜のあいだ、ぼくたちの住所となった――のひとつで、ぼくはベンヤミンに出会った。ベンチに敷かれたわらはとっくに腐っていて、パテ・ド・ジョワ――安もののレバー・ペーストで、これをパンにぬったものがぼくたちの唯一の食物だった――で汚れていた。洗おうにもほとんど水がなかったので、そのわらは顔や髪に貼りつき、毛穴という毛穴にはいりこんでいた。」（ザール）

「洗面用の水も飲み水も、また眠るときにぼくたちが石の上にひろげる敷きわらも、配給制だった。たえず新たな規則、新たな監視兵、新たな悪罵、新たなボバール（デマのことをフランス人はこういう）、新たな命令、新たな悪臭、新たな雨。二万人が星空の下で、うめき、いびきをかき、笑い、冗談をいい、寒がり、汗をかき、そしてどこかへ送り出されていった。〔…〕

この二万人のヒトラーの勇敢な敵手たちのために、フランス当局は、平時の競輪の観衆用にそなえられていた便所をわざわざ閉鎖して、その代りに大きなぶどう酒樽の空樽を一二個、競輪場の一方の側に立て並べた。そのうちの六個では、二万人分のブラック・コーヒーが沸かされた。残り六個の空樽が、二万人の用便にあてられた。六時間もするとそれらは溢れだし、つぎの六時間には、大小便の池を渡らぬことには、溢れかえった樽のところ

まで行き着けなくなった。けれども、将来のパリの競輪の観衆を待つ便所は、ついに開かれなかった。

夜、陰鬱な秋の雨が降ると、濡れた石と汚れたわらの上で、二万人はおがくずのようにくっつきあって横になった。眼下の芝生では機動隊員が、装填した銃と懐中電灯とをもって、歩きまわっていた。」（ケステン）

一〇日めの早朝、ひとびとはいくつかのグループに分けられ、地方の諸収容所に分散させられることになる。ベンヤミンとザールは、どんなことがあっても一緒にいよう、とまえから言いかわしていて、たくさんのバスにひとびとが分乗させられたとき、首尾よく同じバスに乗ることができた。バスは軍隊に監視されながらオーステルリッツ駅へ向かった。この駅からは封印列車に乗せられ、夕方、かれらはヌヴェールに着いた。

ヌヴェールの駅から「志願労働者キャンプ」という名の強制収容所までは、約二時間の行程だった。この遠い道を、ひとびとは急行軍で追い立てられた。ベンヤミンはからだが弱っていたのだろう、「行進の途中で、へばって倒れて」しまう。しかし見ず知らずの一青年が、かれのトランクを持ち、かれを助けた。この青年はその後も、ベンヤミンがヌヴェールの収容所にいたあいだ、いわば弟子のようにかれにつきしたがい、実際的なことにうといかれへの手助けを続けた。

ベンヤミンたちが到着したところは、「内部をすっかりがらんどうにされた」古い城館のひとつだった。「キャンプ」はそのひとつの城館だけではなくて、周辺にいくつかあったらしい。ベンヤミンとは別の、だが近くの収容所にいたというケステンのほうは、収容所は「城館の横手の朽ち果てた厩やこわれた納屋」だった、と回想している。この「納屋」はまたしてもすしづめだった。「雨が降りこんだし、電燈はなかった。その代りに害虫がいて、食事は乏しく、便所は少なすぎた。だからまもなく赤痢がはやりだした。」

ベンヤミンとザールのほうの宿舎は、ともかく城館そのものではあったらしい。かれらがさまざまな階のさまざまな部屋に配分されたときには、もう暗くなっていた。「灯火も、寝台も、机も、椅子もなく、持ちものをぶらさげようにも釘さえなかった。ぼくたちはぐったりして床に寝そべると、すぐ眠りこんだ。」　こう回想しているザールは、部屋分けのときにベンヤミンとははぐれていたが、ベンヤミンのおちついた場所も、たぶん似たりよったりだったろう。

フランスに居住していたドイツ人亡命者たちは、このように半月のうちに、思いがけぬ生活の転変にみまわれることになったわけだが、途方にくれていたのはかれらだけではなかった。急いで抑留の措置をとった側も、同じようにまごついていた。コロンブ競輪場の場面がよくものがたっていたように、フランスの当局には、周到な用意などはなかったのである。

「こうして、皮肉でなくもないことが生じた」と、ザールは書いている。捕虜になったドイツ人たちのほうが、管理者たるフランス人よりも「組織」能力のあるところを、見せることになったのだ。かれらは部屋を掃き、衣類を洗濯した。「にわかにひとりの男が頭角を現わし、何をなさねばならぬかを発言した。〔…〕かれの職業はあるデパートの部長だった。ひとが〈権威〉と呼ぶいわくいいがたいものが、かれの周囲にあった。指示を出すこと、部下を選ぶことを、かれは心得ていた。かれの指令に応じて下水溝が掘られ、水道が、電灯用の配線が起工された。」　敷きわらと毛布が調達され、空罐が泥でみがかれて食器がととのえられた。切手の収集家だった男が郵便局長に、料理の腕で鳴らしていたある画家がコック頭に、それぞれ指名された。たちまちのうちに「ひとつの社会が、カオスとよるべなさのなかから」生じてきた。

慣例どおりにといおうか、ひとびとは妻子から引き離されていた（ベンヤミンはもともと妻子と別れて暮らしていたが）。収容所社会の奇妙な日常が始まる。「生来の孤棲」のなかにいたベンヤミンも、しょっちゅうひとびとと顔をつきあわせていなければならない。「絶えまない騒音」がかれを取り巻いている、とかれはある手紙に書いている。手紙は週に二通だけ、出すことを許されていた。収容所への行進のときにかれを助けた青年の手をかりて、かれは、一種の洞窟を「螺旋階段の下に」つくった。階段が屋根になり、張り渡された麻布が壁になった。そのなかのわらの寝床の上に、かれは「天使に守られた洞窟の聖者のように」住んでいた。

ケステンのほうはかれの「納屋」から、二キロも離れた「崩れた城館」へ、食事のたびごとに行進させられる、という悪条件のもとにあった。その城館がおそらく、ベンヤミンのいた収容所なのだろう――ケステンは、九月二〇日付の妻への手紙で、「新旧の友人たちと雑談している。ときにはヴァルター・ベンヤミンと話す」と伝えている。かれは、ふだんの日は「朝の五時から晩の六時まで」労働に従事せねばならなかった。

ベンヤミンはしかし、医師の診断を受けて、肉体労働を免除されていた。労働班に組みいれられたザールたちが朝、収容所外へ出かけてゆくのを、かれは痛みのこもる眼で見送っていた。秋が深まって寒気がきびしくなってきても、ひとびとは抑留された当時の、夏物の服しか着ていなかったのだから。ベンヤミンのほうは昼には、哲学の「上級者向けの」野外講座を開いていた。聴講料はゴーロワズ（フランスのシガレット）三本だった。

この講座は私的なものだったろうが、収容所長の許可を得た文化的な催しも、ときにはあったらしい。ケステンは、たぶんいくつかの収容施設にいたひとびとをあつめて行なわれた、ある日曜の朝の「文学マチネー」を回想している。講演があり、詩の朗読があって、「赤痢や幻滅」に悩む衰弱したひとびとが、武装兵に囲まれなが

ら、「霧の流れる、冷たい、憂鬱な九月の朝に」それを聴いた。このときベンヤミンは「あるドイツの詩人による、中国ふうの詩の一篇」を、暗誦して聞かせた。ケステンはその詩人の名も、詩の内容も記憶していないけれども、まず間違いなくその詩は、ブレヒトがスヴェンボルで訳した中国の古典詩のひとつだったろう。そういう詩は数篇ある。たとえば――

ぼくらの町でこごえる者をなくすには
どうすればいい？　と問われた知事は
答えた、一万尺の長さの掛けぶとんで
陋巷の全体をすっぽりと覆わなくては。

「志願労働者キャンプ」という名の陋巷のなかの生活は、二ヵ月あまり続く。ナチ・ドイツが攻撃の矛先をさしあたりポーランドに集中していたために、ドイツとフランスとのあいだの戦線には動きがまだなかったことと、アドリエンヌ・モニエをはじめとするフランス人の友人たちの尽力があったこととが、ベンヤミンに幸いして、かれは早目に「正門から堂々と」収容所を出られたひとびとのひとりに、なることができた。その直前のかれのようすをものがたるひとつの逸話を、ザールは、つぎのように書きとめている。

「二人の映画人〔被抑留者〕が、指揮官に〈フランスばんざい〉という映画の製作を提案することを思いついた。そのためにはしかし、とかれらは説明した、毎日かれらはヌヴェール市の図書館へ出かけて、材料を集めなければならない。指揮官は乗り気になり、二人の外出を認めて腕章を交付した。かれらが晩に収容所へ戻ってきたとき、栄養不良の六〇〇人が門にかれらを出迎え、羨望のこもる罵声をあびせた。ワインの香りをただよわせ、

口中に〈フランス料理〉の味をとどめている二人は、寝わらの上でひそひそと、かれらが昼食をとった〈一流〉レストランのことを話しあっていた。

ある日ベンヤミンは、ぼくを物蔭へ連れだした。『腕章が問題だ』と、かれはささやいた、『いや、笑うなよ。ぼくにプランがある。』 かれは指揮官に、文芸雑誌の刊行を提案するつもりでいた。『むろん最高水準のだ。』知識人向けの収容所新聞といってもよい。〈フランスの敵〉として抑留されたのがどんなひとびとかを、全国に知らせよう。『あしたの四時に、ぼくのところへ来てくれ』と、かれはいった、『第一回の編集会議をやろう』。

ベンヤミンは螺旋階段の下を仕切って住んでいた。〔…〕ぼくが四時に着いて、いまや秘書を勤めている天使〔ベンヤミンに助力した例の青年〕にまず来意を告げ、麻布のカーテンをあけると、すでに別の二人がわらの上にすわっていた。編集会議が始まった。天使が兵士たちから貰ってきた指ぬきをさかずきにして、こっそり持ち込んだブランデーを飲みながら、雑誌の体裁をどうするか、ぼくらは話しあった。ベンヤミンはまじめくさっていて、ほとんど厳粛だった。この企てのすさまじいまでの喜劇性を、見たところ、かれはほとんど感じとっていなかった。『諸君、腕章が問題だ』と、かれは幾度もくりかえした——まるで、異論の余地のある哲学的立場を弁明するかのように。〔…〕

ぼくたちは〈編集会議〉のために毎週二度づつ、四つん這いでしか這いこめないベンヤミンの仕切りのなかで出逢い、指ぬきから兵士用のブランデーを飲み、ちびた鉛筆で包装紙に書きつけた原稿を、かわりばんこに朗読した。ベンヤミン自身の文章が何を扱っていたかは、ぼくはもう憶えていない。それがまだ準備段階にあったせいだろうか。思うに、できあがったら雑誌は、じつに良い重要な雑誌となり、収容所の垣根をこえて世界への道

を見いだしたことだろう。残念ながら第一号はついに出なかったし、ぼくたちが腕章にありつくこともなかった。数週間後に〔…〕ベンヤミンとぼくをふくめた若干名は、フランスのペン・クラブの尽力による政府命令にもとづき、釈放されてパリに戻ったのである。」

蛇足を加えればぼくは、ザールとは違って、この雑誌編集の試みの「すさまじいばかりの喜劇性」を、ベンヤミンが十二分に感得していた、と考える。かれのまじめさの背後に、たぶんかれのユーモアがあったのだ。耐えがたい収容所の日々のなかで、かれの「希望という手仕事」（ブレヒト）を支えていたユーモアが。

境を越える

一九四〇年九月二六日

一九四〇年五月一〇日、ベンヤミンがアドルノに「歴史哲学テーゼ」の成立を知らせる手紙を送った日の三日後に、第二次大戦の開幕以来八ヵ月にわたってほとんど動きを見せなかった西部戦線が、突如激動にみまわれる。ナチ・ドイツが、オランダ、ベルギー、ルクセンブルクの中立を侵犯して、一三七個師団の大軍を一挙に、この方向からフランスに向かわせたのだ。この侵攻部隊は一路、さえぎるもののない勢いで、パリをめざした。

パリでは五月一三日、昨年九月に強制収容されたあと涯しない調査の末にやっと釈放されていたドイツ人たちに、ふたたび収容所ゆきのための出頭命令が公示される。携行を許される手荷物は三〇キログラム以下。男性は一四日に、女性は一五日に、それぞれ所定の場所へ出頭しなくてはならない。

この時点から、ドイツからの亡命者たちの運命は従来にもまして、さまざまに分岐してゆく。釈放される者、義勇兵を志願してフランス軍に編入される者、脱走に成功して（フランス敗戦の混乱のなかではその確率は大きかった）フランスの民衆のあいだにまぎれこむ者、自殺する者、死亡する者、各地の収容所を転々とさせられた末にドイツ軍に引き渡される者、脱走―逮捕―強制収容という循環路をいくたびか辿り辿らされる者、あるいは最初から潜行する者、あるいはまた、まったく例外的に（ハンガリア生まれのアルトゥーア・ケストラーのように）、外人部隊に志願することによってそれまでの名と経歴を抹消する者、などがあった。

ベンヤミンについていえば、かれは収容はされたと思われるが、今度は日ならずして行動の自由を得た。ハナ・アーレントの証言によると、それは、外交官だったフランスの詩人サン＝ジョン・ペルスの尽力によるものだった。しかしその自由も、かれに仕事の時間をあたえるようなものではなかったろう。というのは、ナチ・ドイツ軍の侵攻が急速であって、六月一四日にはすでにパリが陥落するからである。ベンヤミンは、とるものもとりあえずに避難するほかはなく、五月末か六月初めにルールドへ向かう。「ある友人の奥さんがいつかはそこへ行かねばならないことになっていたので、そのひとに同行して出かけたわけです」と、かれはその地から、パリに残ったフランス女性、アドリエンヌ・モニエにあてて書いている。「ある友人の奥さん」というのは、いかにもベンヤミンらしい韜晦をこめた書きかただが、それはじつはかれ自身の妹だった。――六月一七日、フランスはナチ・ドイツにたいして降伏する。

ベンヤミンはルールドに約二ヵ月、八月初めまで滞在する。同じ時期にフランツ・ヴェルフェル夫妻もそこにいたが、かれらとベンヤミンのあいだに接触はなかったらしい。いずれにしろ、マルセーユを経由してアメリカ

に脱出することを考えていた点では、どちらも同じだった。しかし、フランスの降伏後、八月上旬にいたる六週間、占領地域から非占領地域への列車は軍用で独占されていて、かれらは旅行の許可を得られず、占領地域内のルールドを離れることができなかった。

その日々が重たい不安につつまれていたことは、想像するに難くない。ベンヤミンは八月二日付のアドルノあての手紙に、こう書いている。

「〔昨年の〕九月にぼくを襲った措置は、あしたにも繰り返されるかもしれない――そうなれば、今度こそ見通しは暗い。この数ヵ月のあいだにぼくは、市民的生活を送っていた数かずのひとびとが、沈んでゆくという感じではなくて、一夜にして奈落に顛落してしまうのを見ている。〔…〕つぎの日が、つぎの時間が何をもたらすか、まったく不確定であるということ――このことが、数週間まえからぼくの生活を支配している。あらゆる新聞（ここでは新聞はすべて、いまでは二ページだてだ）をぼくに送達された令状のように読み、あらゆるラディオ放送を凶報の使者の声のように聞くべく、ぼくは断罪されている。なんとかしてマルセーユまで行き、そこの領事館でぼくの要件を弁じよう、とするぼくの努力は徒労だった。〔…〕ぼくがこれまできみに、困難な刻限にあっても冷静さを保っている、という印象をあたえてきたことを、ぼくは希望している。けれどもぼくは、状況の危険な性格に眼を閉ざしているわけにはゆかない。ぼくは懸念するが、この状況から身を救えるひとは、やがて数えるほどになってしまうだろう。」

仕事に沈潜しようにも、原稿も資料も、いまはかれの手許にはなかった。かれは、畢生の労作となるべき「パリの遊歩街（パサージュ）」論の草稿を、パリの国立図書館の司書をしていたジョルジュ・バタイユの厚意で、その図書館のな

かに隠してもらうことができたのだったが、ほかの草稿類は、かなりを携帯してきたとはいうものの、多くは蔵書とともに、パリの居宅に置いてこざるをえなかった。それらを手にする機会は、そしてかれには、二度と恵まれないままに終る。（パリの居宅のなかのいっさいは、やがてドイツ軍に押収される。だがそれは、ベンヤミン自身よりは幸運だった、といえようか。つまりそれはドイツの敗北後、それを再接収したソヴィエト連邦をつうじてＤＤＲに返還され、現在、東ベルリンの芸術院（アカデミー・デア・キュンステ）の手で保管されているのだ。パリの国立図書館のなかに隠された分、およびベンヤミン自身の携帯していた分は、現在、フランクフルト・アム・マインのベンヤミン文庫にある。）

八月初めにベンヤミンは、ヴェルフェル夫妻と前後して、ようやく営業を再開した鉄道に乗り、マルセーユへ向かう。このとき妹はかれと別れたろう。かの女は病身でもあり、アメリカへの脱出を考えてはいなかったと思われるから。

マルセーユは当時、海外への脱出をねがうヨーロッパ各地からの亡命者たちであふれ、ごったがえしていた。著名なドイツ人で、この八月にこの港町にいたことが確認されるひとの名を、思いつくままに挙げてみるだけでも、すぐにつぎのようなリストができあがる。ルードルフ・ヒルファーディング、ルート・フィッシャー、アルカーディ・マスロウ、エーリヒ・ヴォレンベルク、ハインリヒ・マン、フランツ・ヴェルフェル、アルフレート・カントーロヴィッ、ジークフリート・クラカウアー、ハンス・ザール、ハナ・アーレント。最後に名を挙げた三人は、当時同じくここに辿り着いていたケストラーとともにベンヤミンの知人であり、八月または九月にここでかれに出逢ったことを証言してもいる。長篇小説『トランジット』でこのころのマルセーユの亡命者の群像

をヴィヴィッドにえがきだしたアンナ・ゼーガースもまた、このリストに名を書き加えてよいひとりにちがいない。

かれらをこの港町で待ち受けていたものは、貧乏ぐらしと、宿不足とだけではなかった。出国のための中継地であるべきここを、容易には抜け出られぬ迷宮としてしまうビュロクラシーの幾重もの壁が、随処に立ちふさがっているのを、かれらは見ることになる。かれらはまず、めざす外国の、たとえばＵＳＡの入国ヴィザを、その国の領事館を訪ねて入手しなくてはならない。むろんそのためには、かれらの旅券ないし身分証明書が、あるいは収容所からの釈放証明書が、あらかじめととのっていることが要件である。それらがととのっていない者（たとえば収容所からの脱走者）、合法的にととのえることができない者は、なんらかの抜け道を探さねばならぬ。マルセーユに当時、その種の証明書類を組織的に密造するグループが現出したことは、カントーロヴィツの回想などのなかで語られている。

さて、それらの書類があったとして、入国ヴィザはすぐ交付されるわけではない。ＵＳＡを例にとると、移民が許可される数には制限があり、普通に申しこんで順番を待てば、ひとは数年の待ちぼうけを覚悟せねばならなかった。ＵＳＡで教職につくといった理由があれば、短期訪問用の、制限数外のヴィザを申請することができたけれども、この手続きもなかなかややこしかった（たとえば四〇年五月七日付の、ベンヤミンのアドルノあての手紙に、その困難さが語られている）。亡命者問題の緊急性を認識したＵＳＡ内部の少数のひとびとが「緊急救援委員会」を組織して、ヴィザの交付の迅速化をはかるのは、このころからのことだが、さしあたってはその便宜を得られるのは、知名のひとたちに限られていたようである。

ベンヤミンについていうなら、この時点ではかれは、ここまでの関所はどうやら越えていた。かれはたぶんマルセーユで、すでにアメリカにいた友人たちの尽力がみのって、やっとUSAの入国ヴィザを手にしている。しかし手続きは、まだそれでは終りにはほど遠い。

つぎに必要なのはフランスの出国ヴィザである。フランス政府は、七月二二日に結ばれたナチ・ドイツとの休戦協定によって、ナチのブラック・リストに載ったフランス在住ドイツ人の引き渡しを義務づけられていたばかりでなく、兵役義務年齢の範囲内のドイツ人をひとりたりとも出国させるなという指示を、ドイツ軍当局から受けてもいた。ドイツの兵役義務年齢が当時何歳から何歳までだったのか、ぼくには明らかでないが、五月の抑留のための出頭命令が、まず一七歳から五五歳までの男女を対象としていたことは、もしかすると、右の指示と無関係ではないかもしれない。五四歳のリオン・フォイヒトヴァンガーも抑留された。そして出国許可にかかわる明らかな実例でいえば、一八九六年生まれのある男が、兵役義務年齢の範囲内だとして、この時期に出国を拒否されている。だから一八九二年生まれだったベンヤミンも、合法的に出国ヴィザを入手できる見こみは、ほとんどもたなかったろう。

出国ヴィザが得られたなら、つぎには、マルセーユから船に乗るための、乗船券の入手が問題になる。当時船はめったに入港せず、乗船は難事だった。連日のように船会社の窓口へ足を運んで行列に加わっていても、切符がついに買えないことが多かった。そうするとしばしば、入国ヴィザなり出国ヴィザなりの通用期限がきれてしまう、ということが起こる。このばあいは一からやりなおさなければならないから、へたをすれば、ひとは無限の堂々めぐりにおちいってしまう。

これを避けるために、ピレネー山脈を越えてスペインにはいり、さらにポルトガルへ出てリスボンから乗船する、という方途が思いつかれた。リスボンからの船便は比較的につかまえやすかったのである。このルートをとるにはスペインとポルトガルの通過ヴィザを得ねばならず、領事館参りの手数はそれだけ増えるけれども、八月から九月にかけて、多くの亡命者がこのルートを選んでいる。

フランスの出国ヴィザを得られぬひとびとにとっても、この脱出路はいちかばちかの可能性をもっていた。むろん、かれらのばあいには、フランスとスペインの国境を列車ですんなり越えるわけにはゆかない。かれらはフランス側の国境の町セルベールで列車を降りて、スペイン側の国境の町ポル・ボウまで、徒歩で、フランスの国境監視員の眼をくらまして、なんとか辿り着かねばならぬ。セルベールもポル・ボウも海辺にあるのだが、ピレネー山脈が直接に地中海へなだれおちているこの国境地帯では、海岸ぞいには道はない。街道はつずら折りに国境の峠へ登りつめ、またつずら折りに反対側の町へくだってゆく。その峠に両国の国境監視所がある。だから出国ヴィザをもたぬひとは、なんらかの間道を山間に発見するほかはない。セルベールまでは来たものの、そこで行きなやむひとが多かったとしても、当然だろう。フランス警察に加えて、密出国に眼を光らせるドイツ軍のパトロールも、周辺に横行していた。ある記録者は、この時期のセルベールが無数の自殺のあいつぐ、絶望の町だった、と伝えている。

しかし、それでも間道は発見された。個人的に、あるいは「緊急救援委員会」に関係のある若い有志のアメリカ人たちのグループの手びきを得ていくぶん組織的に、間道からの脱出行を試みたひとびとが、この時期にはかなりあった。

これを最初に試みたのは誰だろう？　それはわからない。おそらく成功したり失敗したりしたいくつかのケースが積み重なって、しだいに道らしいものが見いだされていったのだ。そんな先行例のひとつとしてぼくたちは、カール・レツラウのケースを考えることができよう。このひとは非合法活動に練達したコミュニストであって、道のないところに道を発見する才能をもっている。かれは、スペインとポルトガルの通過ヴィザを取得するにはイギリス以外の海外のある国の入国ヴィザを所持することが要件である、と聞かされると、イギリスが目的地にもかかわらず中国（！）の入国ヴィザをとって、さっさと書類をととのえてしまう。それでも年齢のせいでフランスの出国許可がとれなかったので、非合法の山越えをかれは企図する。

「ぼくはバニュルス=シュル=メール〔たぶんセルベールの近く〕の村長が信用できる男で、たぶん左派の社会党員だ、ということを聞きこみ、かれに会いに行った。かれは眼くばせをしながらこういった。亡命者に助言をあたえることは禁じられている。したがって、いま水が涸れている小川を辿って森を抜け、ひとが国境へ登ってゆくことも禁じられている。それでも禁令を侵してあえてこの困難な道を行く者は、山上でフランスの国境警備隊員に出くわさざるをえない。このパトロール班は二時間おきに国境線を歩くのだ、と。村長はぼくにその時間をいった。すばらしい村長だった。

ぼくは教えられた道を登ってみた。嶮しくはあったが、安全な道だった。山上でぼくは繁みにひそんで、二人のパトロール隊員を待ち受けた。かれらは村長が語ったとおりの時間に通りすぎた。そこでぼくはもう一度バニュルスに戻り、脱出路を精細に記すとともにパトロールの時刻を記載した報告書を、マルセーユの亡命者援護事務局にいるぼくの友人あてに、手紙で送った。〔…〕灼けるように熱い真昼、ぼくは嶮しい道を歩いて、スペイ

ン側の国境監視所に辿りついた。ぼくは旅券に印を捺してもらい、ポル・ボウの警察署に出頭するように指示された。」

山越えに要した時間を、レツラウは書きとめていない。しかしかれの少しあと、九月に、かれとほぼ同じ道を辿ったある亡命者は、登り約二時間の行程だった、と回想している。熱暑のなかの約四時間の上り下りは、心理的のみならず肉体的にも、相当の疲労をともなったことだろう。――ともあれ、ひとはスペイン側の国境監視所およびポル・ボウの町での入国審査を無事に通過すれば、この町の駅から西へ向かう列車に乗ることができた。

ベンヤミンが過した八月から九月にかけてのマルセーユは、亡命者であふれていた。かれらは、書類の不備な、あるいは宿を見いだせなかったひとびとを収容所へ逆戻りさせる随時の検問におびえながら、喫茶店や酒場にとぐろをまき、ロゼーを飲み、会話をかわし、新聞を読んでいた。八月二一日の新聞には、「トロツキー暗殺！」という大見出しが見られた。記事のわきには漫画があって、ソヴィエト連邦の国章のハンマーと大鎌が、トロツキーの頭上に落ちかかるところをえがいていた。

この日々にベンヤミンがしばしば顔を合わせたひとびとのひとり、クラカウアーは、かれが「ずいぶん確信ありげなようすに見えた」と回想している。他方、ケストラーの伝えるこの日々のベンヤミンは、ユーモアを失っていないが、捕えられたときには嚥みくだすつもりのモルヒネを五〇錠、常時携帯している。かれはケストラーに、「これだけあれば馬一頭らくに殺せるさ」といい、半分の二五錠を分けあたえる――「どんなことがあるかわからないからな」。

おそらく九月の半ばすぎにいたって、ベンヤミンは、出国ヴィザは持たぬまま、非合法にピレネーを越える決

心をする。その決意には、ハインリヒ・マン夫妻、ゴーロ・マン、フランツ・ヴェルフェル夫妻の一行がアメリカ人の援助のもとに決行した九月一三日（ヴェルフェル夫人の回想）もしくは同月一五日（ハインリヒ・マンの回想）の山越えの成功が、影響していたろうか？　それはわからない。とにかく、かれらから二週間近く遅れて、九月二六日、ベンヤミンは数人のひとびとと同行して、ピレネー山脈を越えた。（この数人の名は、ぼくには知られていない。うち二人は女性で、そのひとりの夫はこのときすでにカリフォルニアに逃れており、のちにベンヤミンの死の報は、かの女からかれをつうじてアドルノたちのもとへももたらされた、ということである。）

ベンヤミンの自殺に終ったこの不運な一日の経過については、ぼくの知るかぎりで、三人のひとが報告している。かれの著作集に付されたフリードリヒ・ポッツスのあとがき、ベンヤミンのフランスの友人ジャン・セルツに送られたアドルノの手紙、そしてハナ・アーレントの著述。（このうち、前二者の情報の出所はたぶん同一だろう。）

ポッツスは書いている。

「ベンヤミンは、ピレネー越えを試みる一団の亡命者の仲間となる。スペイン側の国境の町で、町長は、この亡命者の小グループをゆすろうともくろむ。フランスへ送り返してゲシュタポに引き渡すというかれのおどしを、ベンヤミンは本気にした。九月二六日夜、かれは服毒した。翌朝にはかれはまだ生きていた。けれども、最後の力をふりしぼってかれは、胃を洗滌されることに抵抗した。かれの死は、旅行者たちの通過を可能にした。いわばかれは、身を犠牲にしてひとびとを救ったのである。かれはポル・ボウに埋葬されている。」

アドルノはこう書いている。

「ベンヤミンの死んだ日は、確かには断定できませんが、わたしたちは一九四〇年九月二六日と信じています。ベンヤミンは、スペインに避難しようとのぞんだ亡命者の小グループとともに、ピレネーを徒歩で越えました。一行はポル・ボウでスペイン警察に抑留され、翌日にヴィシー政権下へ送還されると伝えられました。その夜、ベンヤミンは大量の睡眠薬をのみ、あくる朝、かれを救うために試みられた処置に、力をつくして抵抗したのです。」

そしてハナ・アーレントは、つぎのように書いた。

「ベンヤミンの自殺の直接の理由は、普通にはみられない不運のめぐりあわせであった。〔…〕ポル・ボウにいたる比較的に短く、それほどけわしくもない山道は、よく知られていたし、フランスの国境警察によっても監視されていなかった。ただ、明らかに心臓の容態に悩まされていたベンヤミンにとっては、わずかな距離を歩くことにさえ大きな努力が必要であったため、かれが国境にたどり着いたときには、消耗しつくした状態であったに違いない。しかも、かれが加わっていた亡命者の一行がスペイン国境の町に着いたとき、かれらが知りえたことは、じつにその同じ日にスペインは国境を閉鎖したこと、国境の警備官はマルセーユで作成されたヴィザを尊重しないことであった。亡命者たちはその翌日に同じ道を通ってフランスへ戻るように、言い渡された。その夜、ベンヤミンはみずから生命を絶った。その後、かれの自殺に感銘を受けた国境警備官は、かれの仲間たちにポルトガルへ進むことを許した。数週間の後、ヴィザにたいする禁令はふたたび解除された。もう一日早かったなら、ベンヤミンは何の障碍もなく国境を通過したであろう。もう一日遅かったなら、マルセーユのひとびとは当分の間スペインへの国境通過が不可能であることを知ったであろう。この悲劇は、その特別な一日にだけ起こりえた

のである。」（阿部斉訳、アーレント『暗い時代の人々』）

三つの報告は、細部になると微妙な喰いちがいを見せる。その調整を試みることはぼくの任ではないけれども、あいまいさの残る点のひとつ、入国拒否の理由を考えてみよう。ポッツスのいう町長の恐喝というのは、どういうことなのだろうか。山越えした亡命者は、間道から街道へ出て、街道を国境付近まで逆戻りし、スペイン側の税関にまず出頭しなければならないが、そこではふつう、あまりめんどうなことはなかったらしい。問題はそのあと、ポル・ボウの町の所定の場所へ、入国の可・不可にかんする決定を聞くため、再出頭をもとめられることである。その場所をひとびとの回想は、あるいは駅と伝え、あるいは警察と伝えていて、いまのぼくには確定できない。あるいは町役場ということも、ありえないことではないかもしれぬ。ところで、入国許可の決定権をもっていたのは町長だろうか？　これもわからない。スペインには国境警備隊という独自の警察機関があるから、亡命者の入国問題の処理もこの機関にまかされていたのではないか、とも考えられる。そしてこの機関が、ナチ・ドイツの警察組織との連絡をもっていたことも、考えられなくはない。少なくともレッラウが伝えるところによれば、入国の可否を決定する席にはフランコ政府の役人に加えて、ゲシュタポのメンバーが立ち会っており、この男が逮捕令状綴りを手にしていて、旅券の名をいちいちそれと照らし合わせていたという。しかし他方、ハインリヒ・マンの一行は、そのような男の存在を経験していない。

ベンヤミンが入国を拒まれたのは、誰が責任ある係官だったにしろ、その係官の判断ないし恣意によることだったのだろうか？　それとも、かれがピレネーを越えた日が、アーレントのいうような特別の一日だったせいだろうか？　よくわからない。アドルノらの情報の出所はベンヤミンの同行者のひとりだろうし、信頼性に欠ける

とはいえぬ。他方、アーレントは当時マルセーユにいたのだし、事情に通じていたろうとも思える。とにかくマルセーユでは、そう理解されていたのかもしれない。いずれにしろ、ベンヤミンの死の報は、マルセーユの亡命者たちには大きな衝撃だった。多くのひとの回想のなかだけでなく、ゼーガースの小説のなかでも、その衝撃は語られている。

とにかく確かなことは、かれが九月二六日の夕刻に疲れきってポル・ボウに着き、そして何を理由にしてか入国を拒否され、翌日フランスに送還すると言い渡されたことだ。そのあとかれは、ひとりで夜を迎える。それは旅宿でだったか、それとも警察の一室でだったか？　そしてその室の窓からは地中海が、また町が見えていたか？　いくたびかイビサ島に旅したことのあるかれには、たぶんここはまったく未知の町ではなかったろうが。

かれが今度見たポル・ボウの町は、無残なすがただった。一年半前、スペイン内戦の終局近く、この地中海岸の国境の町には、フランスへのがれようとする共和派の難民があふれていた。そしてフランコ派の軍隊は容赦なく、そこへ爆弾と砲弾の雨を降らせた。町全体がそのときの傷口を、まだそのままに開いていた。「家々には窓もなければ屋根もなく、すべての家ごしに空が見える。〔…〕大きくてモダンだがすっかり壊れている駅のホールには、おもしろいほどに雨が降りこむ。〔…〕ぼくたちはやっと、壊れた駅のホテルのなかの、壊れた一室にありつく。窓もなければ水道も暖房もない。〔…〕思いきって、駅前の廃墟へちょっと足を踏みいれてみる。いちめんの瓦礫。窓はひとつも見えず、建物のファサードが二つ三つ残っているだけだ。」（アルフレート・ノイマン）

この風景のなかで、ベンヤミンは何を思ったろうか。二年半まえ、スペイン共和派の打ちつづく犠牲を見なが

ら、その「殉難が自己の運動の名においてではなく、むしろ妥協案の名において」、一方での革命思想と、他方での「ロシア指導層のマキャヴェリズムと土着指導層の拝金主義（マンモニズム）」との妥協のなかでなされていることを傷み、「ぼくとしては、率直にいって、有意味な苦悩とか死とかいった概念をどこからまだ取ってこれるのか、ほとんどわからない」と書いていた（一九三八年三月二七日、カール・ティーメあての手紙）かれは？

「わにの口に鉄のつっかい棒をあてがい、そのなかに住みついて」いたひと、危機に身をさらすことを意識的な方法ともしていたかれは、この夜、みずからそのつっかい棒をはずした。殺戮者の繁栄を多年にわたって見たすえに「越えがたい国境のほとりへ追われ」たかれは、二五錠のモルヒネをつうじ、「越えうるほうの境を越えた」（ブレヒト）のである。

第一次大戦のさなか、まだ二〇歳代のベンヤミンは、ある友人への手紙に、「夜のなかを歩みとおすときに助けになるものは、橋でも翼でもなくて、友の足音だ」という、忘れがたいことばを書きつけていた。同じ手紙でかれは、トーマス・マンの例の「戦時下の思想」を「下劣」と言い棄てている。ベンヤミンの親しい友人の幾人かは、暗鬱な状況のもとで、自殺を選びとっていた。そういうときの、これはことばだった。ポル・ボウでの夜に、かれは、四分の一世紀まえのじぶんのことばを想起したろうか？　どのような友の足音も、もうかれを支えなかったのだろうか？

ともあれ、ポッツもアーレントも書いているように、かれの死が係官に強い印象をあたえたためだろう、かれと同行していた数人の亡命者は、フランスに送還されずに、スペインを西へ通過することを許された。かれらのなかの二人の女性が、ベンヤミンのために、ポル・ボウの墓地の一画の購入費を支払った、といわれている。

しかし旅を急がざるをえなかったかれらは、翌二八日のかれの埋葬に立ち会うことができなかった。かれをほうむったひとびとのなかに、かれの知人はひとりもいなかった。

ポル・ボウの墓地にて
三分の一世紀ののちに

奇妙な駅だった。たしかにトンネルを出たのだが、降り立ったところはまた地下室のように閉ざされている。長いホーム。それに劣らず長く見える、カマボコ型の天井。ホームの、線路とは反対の側には、窓はあるが壁がずうっと続いていて、出口が見あたらない。国境検査官か警官と思える制服の男に、出口をたずねる。かれの指差すほうを見ると、なるほど、壁に一ヵ所、めだたぬドアがついていた。ドアを押す。ちょっとしたホールへ出る。切符売場、小さな売店。そこからは、たった一筋の、細い、コンクリートで固められた壁のなかの通路になる。ここには窓はまったくなく、壁は古びている。しばらく歩いたところで道は右へ折れ、やっと出口が見えてくる。なんの装飾も文字もない。外へ出てから振りかえると、丘の斜面に伸びる巨大な壁のなかに、いま抜け出てきた暗い穴がひとつ、小さく口をあけているのが見える。壁は、そのまま大きな駅舎だ。こうして外に立つと窓が見えるが、窓のある部屋の数かずには、どんな通路から行けば行けるのだろう?

バルセロナから数時間、わりと混んだ急行列車に乗ってぼくはここへ来たのだが、この国境の駅でおりた旅客は、数えるほどでしかなかった。さっさとどこかへ、行くべきところへ行ってしまったのか、もうかれらの影は

ない。

穴のまえからは、急傾斜の細い坂道がくだっている。屋並は淡い霧のなかだ。海からあがってくる霧。そちらへ向かって、ぼくはゆっくりと歩きだす。つつましやかな宿屋(オスタル)や、みやげもの屋のまじる、家と家のあいだを。思っていたよりもずっと、町は小さい。道で子どもが遊んでいる。そうだった、今日は日曜だった。

海は近かった。小さな入江。海岸ぞいに、いくつかの宿屋があり、それぞれ店先の野天に、喫茶用の机とイスを並べている。保養地の風景。ヨーロッパのレジャー・ブームは、ここにまで及んでいるのだろう。ひとびとは鉄道でなく、乗用車でここへ来る——というより、ここを通る。国境に通ずる国道は、峠から、いったんこの海辺までおりてきて、また反対側の峠へとのぼっている。入江のあたりで小休止する車があるので、このあたり、駅よりも多少活気がある。散歩する人影、わずかだが、泳ぐ人影も目につく。

ポル・ボウ。人口二三〇〇。漁港でもあるといわれるが、入江にある施設といえば、小さな波止場がひとつだけだ。出払っているのか、それとも漁業は見棄てられたのか、漁船のすがたはない。

入江の両側に、ピレネー山脈がぐいと尾根を伸ばしてきていて、絶端を二〇〇メートルほどの高さから地中海へなだれこませているのが、流れる霧の合いまに見える。町の背後も山々だ。だからこの小さな町は、ホリゾントの九割以上を、壁で囲まれたかたちになっている。せまい空。そしてさらにせまい地面を、多くもない家々がびっしりと埋めている。海水は澄んでいるし、山々の緑はあざやかだけれども、総体の感じは明るくはない。

ぼくの感ずる暗さは、ぼくが右手の山のかげの、ベンヤミンがほうむられた墓地の在りかを、知っているせいだろうか。ぼくは以前に友人が送ってくれた絵はがきから、ここの墓地のおおよその位置を知っていた。ばかり

でなく、二年前にここを訪れた詩人、長田弘の文章（「国境の墓」。『アウシュヴィッツへの旅』、中公新書、一九七三、所収）によって、ベンヤミンの墓がそこの一区画、五六三号にあったこと、しかしいまでは、その区画が別人の手に渡ったために、かれの墓は可視のかたちでは現存していないことをまで、知らされていた。

大きく迂回する道を辿って、墓地のほうへ登った。霧がうすれて、ぎらぎらした陽光が照りつけてくる。眼下は碧色の海。岬の鼻を道が曲りこんだところで、山の斜面に、墓地が全景を現わしてくる。スペインからフランスにかけての地中海沿岸でいくつか見たのと同じ、海に向かう階段状の墓地で、コンクリート・ブロックか家具ユニットを連想させるコンクリート箱（ちょうど人間が横臥できる大きさの長方体）が幾段か積み重ねられたものが、幾列も連なって並んでいる。

ぼくは、バルセロナ郊外のモンフイチ山の厖大なひとつの斜面が、このような墓で埋められた風景にあい対したときの、異様な感覚を忘れることができない。死者は土に還る、という、なんとなくもっていた観念と、これはなじもうとしないのだ。死者は宙吊りにされている、天と地とのあいだに。生者の住む町から山ひとつ距てて、巨大な石とコンクリートの構築物が、死者をいわば封印したまま満載して、ぎらぎらと烈日を浴びながら、海と向かいあっている。そしてモンフイチでは、その広大な斜面の直下に、崩れかけた軒を並べた、さむざむとした貧民街が連なっていた。

このような墓の成立が、土地の貧しさに由来するものなのかどうか、ぼくは知らない。同じように苛酷な風土と思われる地中海の対岸、アルジェリアでは、死者はやはり土に還ってゆくようなのだから。急にこんなことをいうのは、ぼくの念頭に、もうひとつ突き刺さっている墓地の風景があるからである。それは、アルジェの南方

約三〇〇キロの地点にあるというぼくの知らぬ町、ジェルファの、ひとつの墓地の心象だ。

ベンヤミンの死んだ一九四〇年の前後、ジェルファには、当時南フランスからフランス領北アフリカにかけていくつも散在した収容所のひとつがあって、そこには、前年にスペイン内戦に敗れてフランスへ越境した共和派のスペイン人兵士たちや、さらにその前年の末に同じくフランスへ撤退した国際義勇軍の兵士たちが、収容されていた。不毛の丘また丘、「白塗りの立方体の上に半球がのっかったかたちの」収容所の居住小屋、要塞の暗色の壁、五本のポプラ、そして花の咲くたった一本の木。暑さも寒さも極端な風土。フランス軍の酷薄な監視のもとで、ひとびとはつぎつぎと死んでいった。かれらは、回教徒の墓地とは別の、ここのキリスト教徒たちの墓地の片隅に、埋められた。

わずかなひとびとは脱走した。脱走せずに生き残れた別のわずかなひとびとは、一九四五年、連合国の勝利の機に、収容所の門の外へ出ることができた。一部のひとはそのとき、そのままジェルファに住みついた。「スペインへの帰国をあきらめた以上、世界のどこに、行きたいところがあったろう?」

十数年がたち、アルジェリアではFLNによる解放戦争が始まった。一九六一年の初めごろ、ジェルファの墓地の周辺でも戦闘がある。このときには、FLNは町を解放できずに、退却した。解放軍の兵士たち一〇〇名あまりの死体が残された。この兵士たちの埋葬のときのことを、そしてジェルファに残っていたかつてのスペイン共和派兵士のひとりは、つぎのように書きとめている——一九四二年に首尾よく脱走できた、かつての戦友への手紙のなかで。

きみは墓地を憶えているだろう。一方には富者が天使像やら石の墓碑やらと一緒に。他方には……

「あそこの場所はなんだ？」と、フランス軍の大尉がたずねた。

「スペイン人墓地です。」

どんなスペイン人の墓地か、きみは知っているね。ここで、収容所で、二〇年（！）も前に死んだ連中のだ。かれらのために、きみは憶えているだろう、ぼくらは小さな木の札を立て、かれらの名を書き記したものだった。

「よし、そこを掘れ。」

「骨だらけですよ。」

「そんなの、どこかへ抛りだしちまえ。そして」と、大尉はＦＬＮ兵士たちの死体を指差して、「この駄犬どもをその穴へ抛りこむんだ。」

十分な穴が掘れたと思うと、ひとびとは死体を投げこんだ。けっきょく、ぼくらの仲間たちの骨も、いくぶんかは土のなかに残ったにちがいない。

手紙の筆者はこれに続けて、いまは記憶する者もないであろうむかしの死者たちの名と、かれらのそれぞれのかんたんな特徴とを、淡々と書きつらねている。そしてこの手紙の筆者自身、右の墓地事件の数日後、ＦＬＮの仲間としてフランス軍に捕えられ（その「証拠」は、二〇年以上も前となったスペイン内戦で銃を握ったときの「火薬の匂い」が、かれの手にしみついていたことだという）、銃殺されてしまうのだ。かれもおそらくジェルファにほうむられたろうが、その埋められかたはどうだったろうか？

ぼくがポル・ボウの墓地で、おそらく形状はまるでことなるジェルファの墓地に連想を走らせたのは、直接にはぼくのスペインでの短い滞在のあいだ、内戦以来スペインを離れた、ないし追われた共和派の亡命者たちの文章を読むことを、夜ごとの習慣にしていて、ある夜たまたま、その題材を扱ったマクス・アウブの短篇に行きあたっていたからだが――だが同時に、かれらと同じくスペインに拒まれて死んだベンヤミンの、いまは行方も知れぬ墓のありかたが、ジェルファのひとびとに一例を見る、多くの無名の戦闘者のそれのありかたに、深くかようところがあるからにちがいない。

長田弘によれば、ベンヤミンの遺体はたしかにここの箱型の一区画、五六三号におさめられたのだけれども、数年後に同じ区画は、別人の所有に帰している。だからかれの遺体が（たとえば戦後に親族の手によって）どこか別の土地へ移されたのか、それとも、同じ墓地のどこかにいまも名もなく横たわっているのかは、少なくともさしあたり、誰によっても語られていない。

きみが死のうと思うなら、こころして
墓標を残すな、残せばきみの居場所は明かされる

ということばに始まるブレヒトの二〇年代末の詩の数行に注釈して、この「指示だけは、あるいは古くなったかもしれない。こういう心配は、非合法活動家から、ヒトラーとその一党の手によってすっかり取り除かれてしまった」と痛みをこめて書いたのは、ほかならぬベンヤミンだったが、こうしてかれ自身もまた、ついに、多くのユダヤ人仲間や「非合法活動家」と、その死後のかたちを同じくしたことになる。

霧はだいぶ薄れた。入江の碧色をはさんで、国境の山の稜線があざやかだ。あの下を、トンネルがフランス領のセルベールまでつらぬいているのだな、と思う。一九四〇年の亡命者たちには、そのトンネルは利用できなかった。峠を越える自動車道路も。その国道を、いまは一分と間をおかずに、乗用車があるいはのぼり、あるいはくだってゆくのだが。

ぼくは思いだす。ベンヤミンたちよりも少し以前の時点で、あのトンネルを非合法に通過したひとの例もあることを。スペイン内戦が始まったとき、当時フランスに遁れていたドイツ人労働者の数人が、共和派の民兵部隊に加わることをねがって、旅券なしで、フランスの警察に追われながら、文字どおりやみくもに、あの山の下のトンネルを駈け抜けたことがあったのだ。「一〇〇メートルも走ると、追ってくる者はなくなった。まっくらだった。しかし同志のひとりがマッチをもっていた。照らすと、地面に新聞紙が散乱している。ぼくらはそれでいくつも紙のたいまつをこさえた。とうとう、行く手に光が見えてきた。トンネルは終り、ぼくらはスペインにいた。」

この追憶を語った労働者も、スペインのあとで、フランスの収容所を経験している。かれはそこから、一九四三年、ナチの強制収容所に移送されたが、幸いに、例外的に生き残った。むろんかれは、いたるところで、無数の、墓標のない死に立ち会ったことだろう。

翌日ぼくは、あの国境要塞めいた駅から、フランスへ向かう列車に乗った。国境検査官はいまは（七四年春には）あいそよく、およそ何も調べない。徒歩で山を越えれば約四時間の行程というフランス領セルベールまで、列車はやすやすとトンネルを抜けてゆく。二分とかからなかった。